

古記録の鍼灸

—鎌倉時代・近衛家二代の日記より—

寺川 華奈

日本鍼灸研究会

『医心方』の成立より鎌倉後期までの凡そ300年間は、我が国の鍼灸は隋唐醫學の影響下にあったが、その詳細を知るには古代及び中世の古記録の検討が必須である。

鎌倉時代における近衛家の日記とは家實(1179~1242)著『猪隈關白記』、兼經(1210~1259)著『岡屋關白記』を指す。

著者は以前、平安末期から鎌倉時代に掛けての古記録『玉葉』を取り上げ、その中に見られる鍼灸についての報告を行った。この度は近衛家二代の日記における関連部分を取り上げ、さらに古代から中世に掛けての鍼灸事情について調査したので、ここに報告する。

1. 家實著『猪隈關白記』

建久八年から建暦元年の日次記と健保五年から嘉禎元年の斷簡、健保五年別記が伝えられる。自筆本23巻、鎌倉記古寫本16巻及び自筆・古寫の斷簡が陽明文庫に残る。

鍼灸に關しての初出は正治元年(1199)正月四日の「丙申、天晴、殿下自一昨日後の御鬢左方二聊有腫物事、頗似重、猶醫師等申可令灸給之由、仍令灸給、又令懸水給」とあるように、父である基通の腫れ物に対して灸が施された、という記述である。これも含めて関連用語としては「令灸給」3回、「灸治」16回、「灸了」1回が見られ、禁忌と係わる「人神」7回、「血忌日」3回との関連で「不可鍼灸」3回、「鍼刺・出血」3回、「不灸」2回が見られた。

また本書には醫博士として丹波長基の名前が登場する。長基は杏雨書屋所藏『四華患門灸法』(建久五年奥書、写本)の著者で、養和元年(1181)に勅を報じて『藥種効能鈔』を著した頼基の子である。

2. 兼經著『岡屋關白記』

貞應元年から建長三年まで記が現存する(ただし欠年あり)。自筆本は1巻のみが残り、鎌倉期古寫本(6巻)、室町後期写本(鈔本、2冊1巻)が陽明文庫に所藏されている。

関連記事は寛元四年(1246)二月二八日の「頂上竝腹少々加灸、頼季(丹波)朝臣加灸點、〔割注：五處、号頭也、百會、同、胃管、腹〕、長絹五疋給頼季朝臣、相具參入之間、季康(丹波)朝臣給二疋」に初出する。

頼季、季康は共に既出の長基の子で、前者は建長六年(1254)秋に上皇の喉腫を鍼にて治し、後者は建長元年(1249)二月に兼經の瘡を治したと『皇国名醫傳』に記されている。また寛元四年正月から六月までの事柄を鈔出した古寫本には「御灸醫師」と記されている。

関連用語としては「御灸」3回、「加灸」3回、「加灸點」1回、「灸穴」1回、「灸治」1回である。

本書の特徴の一つとして、小兒に対する施術の記載がある。寛元四年(1246)閏四月十一日「己亥、天晴、小兒(三歳)、加灸」とあるように、兼經が娘に對して灸治を受けさせている。また2つ目の特徴として、施術場所の表記の方法である。『猪隈關白記』では殆どが腹・胸・肩といった部位名でなされているの對して「幽門、期門、腹也」と穴名と場所とが併記されている。

なお本兩書は『玉葉』(鍼灸に關する条文は仁安二年(1167)~建久八年(1197)以降、50年間の鍼灸事情を垣間見る資料としても價值があると考えられる。